

播磨の古代寺院と造寺・知識集団 51

備前（岡山市）の
幡多廃寺と賞田廃寺

寺 岡 洋

はじめに

9月上旬、「18切符」で岡山へ出かけ、駅で自転車を借り（350円／日）、旭川左岸に所在する岡山市埋蔵文化財センター、幡多（はた）廃寺址、賞田（しょうだ）廃寺址へ出かけた。旭川東岸は遺跡の密集地域である。幡多廃寺は名称からいかにも秦氏主導の渡来系寺院を想い起させ、賞田廃寺は吉備地域唯一の双塔伽藍であり、史跡公園に整備されている。旭川東岸には、他に網浜廃寺と居都（こす）廃寺が存在する。



岡山市埋蔵文化財センター（岡山市中区網浜）

JR岡山駅の南外れに「駅リン」がある。「道路地図」を見ながら東に向かい旭川を渡り、左岸を南へ、およそ3kmくらい。建物は操山（みさおやま）山塊の西端にあり、北を除く三方は低い丘陵に囲まれている。古代には格好の浦・泊だったであろう地形である。1F展示室はこじんまりしている。最新の「紀要」を購入できた。

網浜廃寺 一旭川河口に

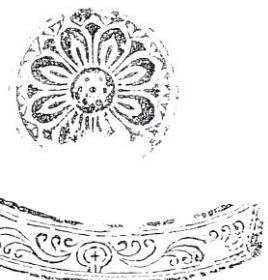
立地する古代寺院—
近所に網浜廃寺址がある
のだが、住宅地内で探すの
は無理だろうと断念。

「これまで基壇、溝等
(宅地崖断面で確認) の遺
構と、礎石や多量の瓦片が
出土している。出土瓦は奈良時代前半の軒丸瓦から平安
時代後期の瓦にまで及んでいる」〔岡山市1975〕。

亀田氏は、「単弁八葉蓮華文軒丸瓦」（上図）について朝鮮系瓦である可能性を指摘されている。「網浜廃寺例の特徴は蓮弁内の子葉の表現である。一般的な単弁の子葉とは明らかに異なる。また間弁も頭部が突出し、その外側に線で鋸歯文（きょしもん）が表現され、その外側に三角形が表現される点も特異である」〔亀田2004〕。

草原氏は、「網ノ浜廃寺の平安時代初期の軒瓦（上図）は、備中國の秦原（はだわら）廃寺（総社市秦）で出土しているものとよく似ている」と指摘されている〔草原2017〕。秦原廃寺は秦氏主導による寺院とされる。造寺集団のネットワークが想定できる。

網浜廃寺はその立地から水運に関連する氏族集団が創建を主導した寺院と考えられ、播磨の揖保郡浦上里に所在する金剛山廃寺（たつの市）のような性格の寺院であろうか。金剛山廃寺は「風土記」の記事から海人集団である阿曇（あづみ）氏が創建を主導したとされる。



百間川（ひゃっけんがわ）遺跡群

幡多廃寺址へ国道2号線を北東方面に向かう。幅広い百間川を渡り、すぐ北上すれば幡多廃寺址。百間川は江戸時代初期に開削された旭川の放水路で、現代の改修工事により多くの遺跡が発掘調査されている。

百間川沢田遺跡で確認された弥生時代前期中葉の環濠集落がよく知られるが、古代の遺跡も多い。

百間川米田遺跡（岡山市中区米田）

奈良時代の掘立柱建物14棟が検出され、遺物では文字資料が注目される。須恵器杯には、「官」の逆字が押印されたもの、「上三宅」と墨書されたものがあり、「市」と墨書された丹塗りの土師器も出土した。円面鏡、転用鏡、役人の着用する銅製帶金具、綠釉陶器などが出土しており、倉庫群を中心とした公的な施設（上道郡の郡津あるいは備前国府の津）が想定されている〔岡山県2002〕。「市」の可能性も指摘される〔竹森2007〕。

「上三宅・官」は、ヤマト王権が設置したミヤケ（官家・屯倉・三家・三宅）の遺称かもしれない。

渡来（系）集団の痕跡

百間川の河口付近には右岸に「福泊」というミナト地名が残り、背後の笠井山（136m）麓には、「吉備津岡辛木神社」という曰くありげな社が立地する。吉備津の辛木（韓来）と読めなくはない。左岸には「大多羅」という朝鮮半島洛東江流域の加耶（かや）の地名が残っている。江戸時代初、「大多羅寄宮（おおだらのよせみや）」（国史跡）が上道郡大多羅村に創建されており、大多羅も古くからの地名である。大多羅の西隣が幡多村になる。

幡多の地は河口の辛木（韓来）や大多羅と関連あるであろう。郡津・国府津あるいは国府市の管理・運営を担った官人（役人）には、加耶系やら秦氏がいたのではないかと推測できる。

幡多廃寺 一住宅地に残る
巨大な塔心礎—

JR山陽本線・高島駅南東の新興住宅地内に塔心礎・土壇（国史跡）、少し北に小さな稻荷社が所在し、周辺一帯が幡多廃寺址になる。塔心礎を探すのにうろうろしたが、保育園の東、150mくらい。岡山市埋蔵文化財センターからおおよそ5km弱か。

岡山市中区赤田（あこだ）塔元。合併前は上道（かみみち・じょうとう）郡幡多村だった。『和名抄』にも幡多郷が記載されており、幡多は古代から続く地名である。

木簡に記された「幡多郷・秦」

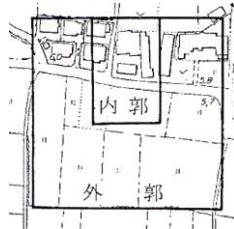
奈良文化財研究所「木簡データベース」を検索すると、平城京で出土した木簡に、「備前國上道郡幡多郷 秦者人・秦忍山」が登場し、幡多郷に秦氏が居住していたことが確認できる。『播磨國風土記』で里名に氏名（うじな）が付けられる例をみると、巨智（こち）里一山村巨智、桑原里一桑原村主（すぐり）、起勢（こせ）里一巨勢部、穂積里一穂積臣など、地域を開拓した有力な氏族集団である。

周辺の白鳳・奈良時代の遺跡

ハガ遺跡（岡山市中区国府市場）

一国府付属の仏教関連施設

幡多廃寺の真北約1km、高島小学校のプール建設にともない調査され、国府関連遺跡と考えられている。



正方位で一辺が約100m四方の外郭と、30×60mの内郭で構成され、内郭には建物痕跡があり、外郭には工房などが存在する類例のない施設である。7世紀末から8世紀初頭に出現し、12世紀まで存続。

三彩陶器多口瓶、羊頭硯など稀有な遺物があり、墨書き土器「寺寺」、軒瓦、瓦塔、泥塔、おびただしい燈明皿などが出土した。油痕の残る燈明皿は法会（ほうえ）が行われたことを裏付ける。国府に付属した寺院的な官衙（役所）と推測されている〔岡山市2004〕。

寺院ではないが、寺院の機能を持つ（？）このような官衙（かんが）の存在は、播磨はもとより畿内でも知られず、全国すべての国府に普遍的に存在したものか、備前のみの例なのか、注目される遺跡（施設）である。

古代山陽道 備前の古代山陽道は大きく2ルート想定されているようだが、**古代山城**である大廻小廻（おおめぐりこめぐり）**山城**の北麓を通り、備前国府を経由する南側ルートはハガ遺跡の北を東西に通過する。

備前国府址推定地（岡山市中区国府（こくふ）市場）

山陽道に南面して推定備前国府が立地する。備前国府の遺構は確認されていない。

居都（こす）廃寺（井寺廃寺 岡山市東区宍廿）

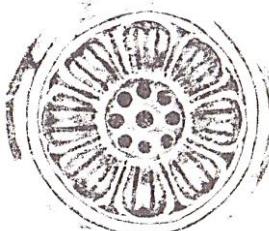
賞田廃寺の東方約3km、JR東岡山駅の北になる山あいの平地に瓦の散布地が知られるが、明確な遺構は確認できないとのことで、今回はバス。山陽道の備前国府通過ルート沿い立地する。

幡多廃寺址の現状

幡多廃寺は平野の微高地を選地しており周辺は平地である。

発掘調査された1972～73

年頃の写真では周辺に水田が広がる。古代にはどの川も同じであるが、旭川も平野部は乱流しており、分流が幡多廃寺周辺、操山北方を蛇行して流れ、福泊の方面に流れていったことが発掘調査から確認できる。



軒丸瓦第Ⅰ様式

塔心礎（前頁） 住宅地の道路脇に残されている。稲荷社には礎石とみられる石も残る。心礎は花崗岩を変形六角状に加工し、長径2.60m、短径2.10mと大きい。

幡多廃寺の発掘調査

発掘調査は2回行われている。寺址は微高地に立地しており、近世の水田化の際に地下げされていた。

「遺構は、全て基壇部分の削平された基礎地形であって、的確に基壇規模・方位を確定できるものが何一つ遺存しなかった。幡多廃寺の伽藍は、概略的な想定が一応なされるが、その詳細な設定がなしがたい」。

推定伽藍配置について 一大官大寺式か一

塔心礎は動いていないことが確認されており、伽藍配置の基本になる。最初の調査では、一應、法隆寺式伽藍配置のように塔・金堂・講堂と推定される建物が配置されている。2度目の調査は、「推定伽藍配置」の塔址の南を東西に横切る市道の調査である〔岡山市2015〕。

二次調査では、検出された「溝状遺構の瓦溜り」を南北方向の建物の雨落溝と推定し、「推定建物1・2」を想定し、東向きの「**大官大寺式伽藍配置**」ではないかとされている。大官大寺（明日香村）は、本来は双塔伽藍を目指していたという説が有力である〔花谷2003〕。

遺物

軒丸瓦（第Ⅰ～Ⅴ様式）、軒平瓦（第Ⅰ～Ⅲ様式）、鷲尾、丸瓦、平瓦など瓦類、燈明皿も出土している。誌面の関係で、瓦は次の機会に。5世紀初の初期須恵器も出土しており、下層に先進的な集落が存在する。

年代（創建～廃絶年代）

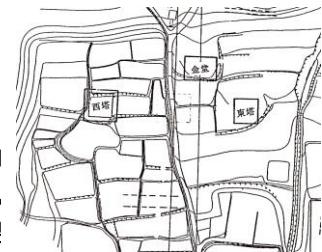
軒丸瓦の編年から、7世紀末から平安時代中期頃。

造寺集団

「いわば郷名氏族の秦氏の氏寺であったと推測することも不可能ではないと考えられる」〔岡山市2015〕。

賞田廃寺

一吉備唯一の双塔伽藍



幡多廃寺の北方、竜の口山南麓の地を占め、平野部を見渡せる絶好の位置に建つ。眼下には推定備前国府、山陽道、ハガ遺跡などが立地する。『むくげ通信』283号の「奥村廃寺と双塔」で簡単に紹介している。

賞田廃寺の創建は飛鳥時代に遡り、「おそらく一部に瓦を象徴的に用いる程度の小堂」が作られ、白鳳期に金堂が建築され、奈良時代に両塔が東塔、西塔の順に建つ。

今号では双塔に関するのみ、私説を述べる。

均整でない双塔の配置 一 造塔集団が異なるか？

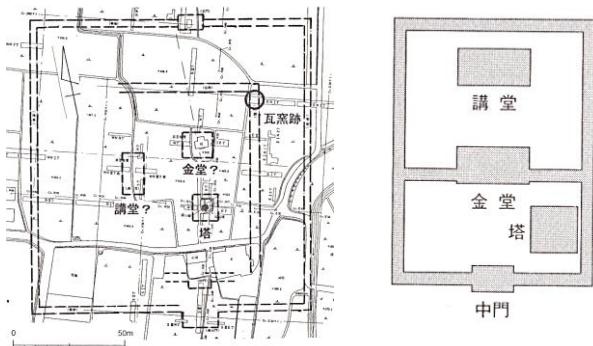
小堂→金堂→東塔→西塔と順次寺觀が整うのであるが、図で見るよう、なぜか、西塔が離れており、バランスが崩れている。建築主体が单一ならば考えにくい。東塔と西塔は、造塔を担った集団が異なった可能性があるのでないか。そのような事例が存在するだろうか。

奈良時代後半（天平宝字七年〔763〕）の事例であるが、伊勢の**多度神宮寺**では、異なる人物が檜皮（ひわだ）葺きと瓦葺の三重塔を造立している〔栄原2011〕。塔の配置は分からぬが、見た感じの異なる三重塔が二つ建てられた例があったことがわかる。

賞田廃寺は上道氏の「氏の寺」と理解されているが、栄原氏が播磨賀茂郡で論証されたように〔栄原1999〕、上道郡においても上道氏が他の氏と「地域小集団」を形成していたと考えられ、双塔が異なる「小集団」により建立された結果、バランスが崩れたのかもしれない。

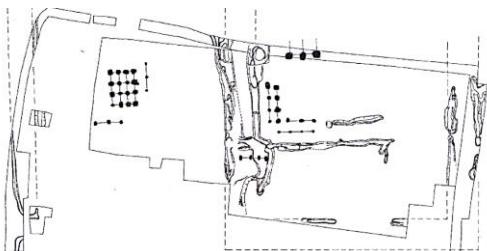


幡多廃寺調査区配置図 [岡山市2015] より

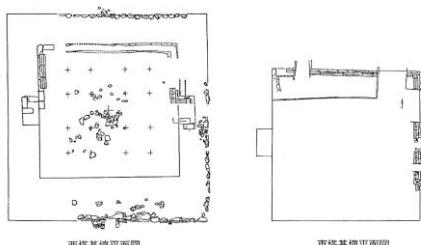


従来の幡多廃寺伽藍配置想定図

大官大寺伽藍配置



ハガ遺跡遺構図 I期（8～9世紀）

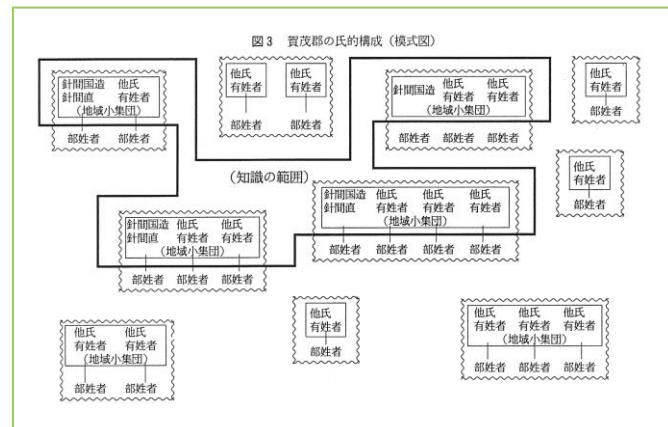


賞田廃寺 西塔基壇

東塔基壇



賞田廃寺出土
「上道」線刻丸瓦



賀茂郡の氏的構成（模式図） [栄原1999] より

■引用・参考文献

賞田廃寺発掘調査団 1971 『賞田廃寺発掘調査報告』

岡山市教育委員会

岡山市教育委員会 2005 『史跡賞田廃寺跡』

—史跡環境整備事業に伴う発掘調査報告—

岡山市遺跡調査団 1975 『幡多廃寺発掘調査報告』

岡山市教育委員会文化課

岡山市教育委員会 2015 『幡多廃寺 一旧備前国上道郡所在の古代寺院の発掘調査報告』

岡山市教育委員会 2004 『ハガ遺跡』

—備前国府関連遺跡の発掘調査報告—

岡山県教育委員会 2002 『百間川米田遺跡4

—旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査—

* * *

栄原永遠男 1999 「郡的世界の内実—播磨国賀茂郡の場合—」『人文研究 大阪市立大学文学部紀要』51巻 第二分冊

栄原永遠男 2011 「興道寺廃寺の規模と関係氏族」

『ここまで分かった！興道寺廃寺』美浜町教育委員会
花谷 浩 2003 「薬師寺」『奈良の寺』岩波新書

龜田修一 2006 「吉備の朝鮮系瓦」

『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館

湊 哲夫・龜田修一 2006 『吉備の古代寺院』

吉備人出版

竹森友子 2007 「地方市について—“市”墨書き土器出土遺跡の分類を中心に—」『古代都市とその形制』
奈良女子大学21世紀プログラム集 Vol.14

寺岡 洋 2009 「『知識』、知識集団の実態を日本・古代朝鮮にみる」『むくげ通信』234

寺岡 洋 2009 「既多寺知識経と賀毛の古代寺院」
『むくげ通信』236 むくげの会

寺岡 洋 2015 「『氏寺』と『知識寺（知識の寺）』」
『むくげ通信』272 むくげの会

寺岡 洋 2017 「播磨・奥村廃寺の双塔について」
『むくげ通信』283 むくげの会

草原孝典 2017 「備前国西半の古代山陽道のルート変更について」
『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』